Imajin21

今人創造

風のはじまり
光のつづき

奈良のartist
現代墨流し染　安川　忍

「イマジン21」第26号　平成25年12月1日発行（年2回 春秋発行）

本年も早や師走の月を迎えました。秋号少々遅れましたがお届けいたします。私事ながら、小生本年５月で社長を辞任し、会長に就任いたしましたが、イマジン21への想い熱く、こちらの発行人はもう少し続けたいと思っております。

さて、奈良大学の先生方によるリレー連載・奈良の風景は、毎回好評で、お書きくださった玉稿は皆様から期待と興味をもって楽しんでいただいているシリーズです。今回は古都奈良のあり様について、西山要一先生に、フェノロサの125年前の講演を中心に展開していただきました。フェノロサといえば、薬師寺東塔を「凍れる音楽」と表現した言葉はあまりにも有名です。今回は私の知らない、いや一般にも知られていない事を紹介してもらい、今日でも奈良で生活する人には大きな警鐘となったのではと思います。

「保存と開発」は奈良においては永遠のテーマですが、このことにしてもローマの例に学ぶべきでありましょう。奈良は、このままではあらゆる面で取り残されていくのではないかという危機意識が広く浸透している今、「奈良の諸君奮起せよ」と語ったフェノロサの言葉をじっくりと噛み締めて、奈良の発展と芸術・文化の花を咲かせてもらいたいと願う昨今です。

代表取締役会長　近東　宏光

Imajin21

今人創造

リレー連載 世界遺産 奈良の風景 8 …… 1～3

奈良の artist 06 安川　忍 …… 4～5

まちかど探索 奈良マラソン …… 6～7

NARA 道の駅 station 5 ふたかみパーク當麻 …… 8～9

Essay 印刷文化逍遥 26 …… 10～11

特集 奈良の城 七 柳生城 …… 12～13

職場風土改革促進事業への取り組み

少子高齢化社会にあって、これからは益々多様な働き方が企業に求められております。一方、働く人は、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）をより重要視する中にあって、企業としてはそれらを必要十分に充足する環境づくりが不可欠であります。

弊社は、平成14年にはISO14001を認証取得、また18年にはプライバシーマークを取得するなど、時代のニーズに合致した経営推進に努力してまいりました。そして、労働時間等設定改善法が施行されて（平成18年）以後、社内で委員会をたちあげ「有給休暇を取得しやすい環境づくり」をめざし、残業が避けて通れない業界にあって、残業時間を少しでも減少する努力なども含め企業理念の中にある「人間生活の向上」に邁進したいと考えております。

人間生活の向上とは、従業員の仕事と家庭の両立を支援することも大きく関係しており、具体的な取り組みは下記の通りです。

具体的な取り組み

1. 仕事と家庭が両立できる働きやすい会社作り（ワーク・ライフ・バランスの推進）
2. 育児・介護休暇制度の充実を図る
3. その制度を利用しやすい環境作り
4. 管理職層への研修の実施
5. 両立支援制度の労働者への周知徹底

代表取締役社長　近東　宏佳

わたしたちができる環境づくり
自然との共存を図りながら
限りある資源を大切に使い環境を守っていく
私たちは時代に役立つ企業であり続けたいと考えます

編集／制作／発行
共同精版印刷株式会社 http://www.kspkk.co.jp/

本　　社：〒630-8013 奈良市三条大路２丁目２-６ TEL 0742-33-1221 FAX 0742-33-7035
大阪支社：〒542-0082 大阪市中央区島之内１丁目１２-３ TEL 06-6271-7951 FAX 06-6271-7954
東京支社：〒116-0014 東京都荒川区東日暮里５丁目６-４ TEL 03-3802-4741 FAX 03-3802-4740

FSC www.fsc.org ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C007718
GOLD+ P09-0023 環境保護印刷
たいせつにしますプライバシー 24000148(04) JISQ15001:2006準拠
MOODY INTERNATIONAL MS JAB EMS CM057
09646 本社・本社工場

本誌に対するご感想、ご要望などがございましたら、上記本社内「イマジン21」編集部までお寄せください。

世界遺産
The World Heritage

リレー連載

奈良の風景 8

～文化財保存学者の視点～

素晴らしき奈良の風景

〝国際文化観光都市・奈良〟は近年、その名の通り海外からの観光客も増し賑わいを実現しつつあるように思われます。近鉄奈良駅を一歩踏み出し、東を仰げば若草山・春日山を背景に緑豊かな奈良公園、数分歩みを進めれば、立派な角を誇らしげに堂々闊歩する雄鹿や睦まじい親子鹿の群れが〝ようこそ奈良に〟と出迎えてくれます。さらに東に歩を進めれば、興福寺、東大寺、春日大社、春日山原始林が次々と展開する〝世界遺産・古都奈良の文化財〟は如何とばかりの風景は、奈良の歴史と文化が育んできた〝絶品〟といっても過言ではないでしょう。

この素晴らしき風景は、歴史的・地理的に好条件に恵まれた奈良であるから形成されたものでもありますが、奈良に住まいし生活を営んできた人々の姿を振り返ると、そこには文化を守り育てる強い意志が存在したこと、それゆえに現在の素晴らしい奈良が形づくられていることが理解できます。

私は1973年に財団法人・元興寺仏教民俗資料研究所（現・元興寺文化財研究所）に入り、1985年からは奈良大学文学部文化財学科教員となり現在に至っています。文化財の保存科学研究の生活も40年余が経過しましたが、保存科学は文化財を保存する材料や技術の研究、科学的保存処理を実践するとともに、文化財保存の思想や論理を組み立てることもあわせて大切なことと考えてきました。保存科学にとっても、奈良の文化財が奈良の人々によってどのように守り育まれてきたのかを知り、次世代に伝えることは大きな課題です。

明治維新のもたらした文化財の危機

文化財保存の思想と論理を考える時、1868（慶応4）年3月に布告せられた神仏判然令（神仏分離令）を契機とする文化財の危機が重要な意味を持ちます。日本には古来、山や海などの自然界から竈（かまど）やトイレなど家の中に至るまで八百万の神々がいると信じられていますが、この神々の信仰と飛鳥時代に渡来した仏教が、やがて平安時代に一体となって（神仏習合）日本の歴史・文化が形成されます。その姿は、奈良では東大寺と手向山神社、興福寺と春日大社が好例ですし、私達に身近な季節ごとの祭礼や日々の営みの中にも、神道と仏教の要素が強く結びついて、ごくあたりまえのこととして根付いています。

神仏判然令は、1000年の永い時間をかけて形成して日本文化の基底となっている神仏習

若草山麓から東大寺 大仏殿、奈良公園を望む

合を解体して仏教を除き、天照大御神を始祖とし最高神とする神道を国家神道にまとめることとする布告ですから、社会や文化の価値観に大変革をもたらしました。

神仏判然令が発せられると、全国に廃仏毀釈の嵐が吹き荒れ、寺院仏閣が破壊され、経済基盤を失った寺院は、仏像や書画を売り払い、多くの寺院が廃墟となりました。南都仏教の中心であり、かつ大和一国の経済や産業を支配し繁栄を極めた興福寺でさえも、凡(すべ)ての僧が還俗し管理されなくなりました。奈良町のシンボルである五重塔までもが売りに出されたと言われています。天理市の石上神宮の神宮寺である内山永久寺は伽藍のことごとくが打ち壊され、仏像や什器は散佚(さんいつ)しました。このような廃仏毀釈は奈良ばかりか全国を席巻し、特に薩摩・土佐など明治維新を推し進めた諸藩の地では多く発生しました。

この時破却された文化財や、諸寺院や所蔵家が手放した文化財の数は明らかではありませんが、日本に所在すれば国宝指定になる美術品が現代、海外の美術館所蔵品となっています。

内山永久寺　大伽藍を誇っていた（『大和名所図会』/上図）が、
今は柿・ブドウ・野菜の畑となり往時の面影はない

フェノロサの講演「奈良ノ諸君ニ告グ」

アーネスト・フランシスコ・フェノロサはアメリカ・ハーバード大学で政治経済学を修め、1878（明治11）年に東京大学に着任し、政治学・哲学・理財学を講義しました。来日後に日本美術の研究を本格的に始め、1884（明治17）年には文部省図画調査会委員に任命され、以後、文部省に出仕していた岡倉天心とともに近畿地方の古社寺調査を幾度も行い、政府の文化財保護の体系づくりに貢献しています。

フェノロサの講演「奈良ノ諸君ニ告グ」は1888（明治21）年6月の法隆寺宝物調査の途次の6月5日に、奈良県知事・税所篤(さしょあつし)らの依頼により行われました。この講演でフェノロサは、奈良の美術研究の現状を憂い、古来、優れた歴史文化環境にある奈良の人々にこそ新しい日本社会を創ることができると奈良人の奮起を促しています。

フェノロサは言います。「奈良はイタリアのローマと同じく古代に優れた文化を誇っていたが、やがて政治や文化の中心から外れ栄華が失われていった。しかし、中世を迎えるとローマは宗教・文化都市として再生しヨーロッパの中心として復活するが、奈良は未だ再生に到っていない。その差異は、古代の美術を研究しそれを生かした社会を創るか否かにある。奈良には、正倉院はじめいたるところに優れた美術品がある。これを珍奇な骨董として見るだけではだめである。その由来や製作技術、作品の背景となる歴史や文

興福寺五重塔より奈良町を望む。
フェノロサも目にしたであろう風景。（大正～昭和初期頃）
奈良大学図書館所蔵　北村信昭氏旧蔵ガラス乾板よりプリント

化を丹念に調査研究し認識することが大切であり、奈良には研究を深める素地が十分にある。奈良の宝は日本の宝であり、世界の宝であり、これを研究し復興することは奈良の諸君の義務であり誇りでもある。奈良の諸君奮起せよ。」

フェノロサの講演「奈良ノ諸君ニ告グ」を聴講した当時の人々はどのように感じたのでしょうか。フェノロサの思いは、今に生きる私たちの心をもとらえます。一外国人の感想とするにはあまりにも深い真実と強い思いがこもっています。

般若寺の笠塔婆（右奥）と支持台

般若寺笠塔婆の修復

般若寺は花の寺とも称され、初夏のアジサイ、夏から秋のコスモスなど四季の美しい花々が境内を彩ります。般若寺を代表する文化財は十三重の石塔です。その北側の築地塀に沿って、高さ4mほどの大きな2基の石造の笠塔婆と2基の奇妙な鉄の組物があります。

2012年に奈良大学博物館で開催した特別展「文化財はいかに守られてきたか」を立案中にこの鉄の組物に気付きご住職にお尋ねしたところ、明治時代に遺棄されていた笠塔婆を修復した際に、背後の支えとしてフランスから輸入した鋼鉄で作ったものである、また、修復の経緯を記録した文書が大切に保存されていることなどを教えられました。笠塔婆の鉄製支持台と文書を借用し、明治時代の文化財保存修復の好例として特別展に展示しました。

さて、修理一件文書に記されているところによると、笠塔婆は、般若寺の南の街道沿いの墓地入口にあり、明治初年に破却・切断され遺棄されていたが、1892（明治25）年に奈良保勝会の尽力によって般若寺境内に移設・修復したことが記され、発起人・税所篤や工事設計者、監督者が名を連ねています。笠塔婆の運搬経路図や費用の内訳、鉄製支持台の設計図などもあり、当時の笠塔婆再建の様子ばかりか再建に携わった人々の熱い思いが伝わってきます。

神仏判然令・廃仏毀釈から四半世紀を経て、破却した文化財を修復・復興する事業がなされたのです。25年は歴史時間に照らしてみれば短くとも、現在の生活実感に照らしてみれば永く、笠塔婆にとっても永い苦難の時間だったに違いありません。

明治初めの奈良の文化財がたどった苦難の歴史、その中で日本の伝統文化・文化財の価値を再認識し保護に努めた多くの著名人から市井の人々まで、彼らの努力を高く顕彰しなければなりません。今の奈良があるのはこれらの人々の努力と情熱の賜物なのですから。

今の奈良がちょうど良い

国際文化観光都市・奈良には、文化財を守るためにユネスコ世界遺産条約や日本の文化財保護法、奈良県・奈良市などの条令がありますが、一方でこれらの法律や条例に縛られていては開発が進まず、奈良が日本から世界から取り残されるのではないかとの懸念がささやかれています。

しかし、今、奈良を訪ねる人々は、寺院、神社、遺跡があり、周囲の緑濃い山々に囲まれた素晴らしい環境と、交通や宿泊に少しは不便であっても訪れたい、奈良のちょっと田舎っぽい素朴な人々と接したい、そのような思いで奈良を訪れています。文化財や自然がなくなれば、世界の人々、日本の人々から奈良は忘れられることでしょう。

奈良の文化財や自然の中で住まいする私にとって、今がちょうど良いのです。

西山　要一
［にしやま　よういち］
1949年・大阪府生まれ。1971年龍谷大学文学部国史学科卒業。卒業後（財）元興寺仏教民俗資料研究所保存科学研究室（現（財）元興寺文化財研究所）などに勤務、1985年4月より奈良大学文学部文化財学科教授（保存科学）、現在に至る。1987年より文化財におよぼす大気汚染影響の研究、1995年より文化財防災の研究、2002年よりレバノン共和国壁画地下墓の修復を継続中。

奈良のartist 06

現代墨流し染

安川 忍

Yasukawa Shinobu

ふわりと持ち上がった絹布は、不可思議な模様と色彩に染まっていました。チョウの羽を顕微鏡で覗いたか、想像が細胞から宇宙まで巡ったかのような世界観。精妙なトリックを見ているようです。現代墨流し染の安川忍さんは「意味不明なもの」と言って笑います。

自然の意外性が生むアート

墨流し染は、水面に流した墨で模様を描き、それを和紙で吸い取る技法。西洋では「マーブルアート」と呼ばれています。安川さんの父順朗さんはその技法を身につけ、生業としていた。

幼少時、父から基本を教わった安川さんは、「父は職人肌でしたが、私はアートをやりたいと考えていました」。学生時代に物理学（中でも、流体力学に関心を持っていました）を専攻していたこともあって、水ではなく、粘性体である糊に注目しました。

制作過程はシンプルです。長辺約180センチ、短辺約110センチ、深さ約5センチの容器を満たした糊に、染料を浮かべ、デザインをつけて、絹布に染み込ませます。糊が軟らかければ自然に近い絵柄に、硬ければ具体的な絵柄になります。こうしてたどり着いた独自の技法を「現代墨流し染」と称しています。

作品に色が流れ、広がり、とがり、くねって、溶け合う。どれだけ計算し、細心の注意を払っても、絹布をかぶせる一瞬前に一陣の風が吹けば、糊に浮かんだ染料が微動してデザインが変わります。作家の意図が完全に表現されることはありません。

「始めた頃は規則的な柄をつくっていましたが、だんだんと自然に任せた柄に引かれるようになりました」と安川さん。花びらだったり、雪の結晶だったり、サンゴ模様だったり、未明の空だったり。同じ色柄でも、人によって見え方は万別です。「その意味不明さ、得体の知れないものの魅力が私をとりこにします」と言います。

芸術家に列する人の中には、自分の思い通りにいかなかった作品を失敗作だと考える人もいるでしょう。けれど、安川さんは違います。

「自分の実力を60点として、100枚に1枚ほどの割合で、120点のものや見たことのない世界が（絹布に）現れます。これはいったいどうやってできたのか？を追求する作業も醍醐味のひとつ」。人為的にコントロールできない意外性や抽象性が探究心を刺激しています。

国内外で作品を披露

葛城市に構える築100年以上の自宅兼工房で創業したのは1955年。2012年には株式会社染美堂を設立しました。「葛城山の水がきれい。自然風景に恵まれている。ゆったりマイペースな時間」が創作を支えています。

作品の数々は、全国の百貨店やギャラリーでの展示会・個展、スペインやフランスなど海外のアート展に出展。安川さんが色彩を吹き込んだ作品を使って、奥様の貞子さんがネクタイや帽子、ブローチなどを創作しています。

大学の応用化学科で染色技術を学んでいる長女の未来さんが継承したいと言ってくれているとのこと。

「私自身、富士山で言えばまだ1合目。一生、登れないんじゃないかと思います。だからやめられない。力を入れすぎず、遊び心をなくさないように作っていこうと思います」

こうしたいという構想を描きながらも、自然に逆らわず、意外性を楽しむ現代墨流し染。一期一会のアートが染美堂流なのです。

Profile

やすかわ　しのぶ　1951年、新庄町（現葛城市）生まれ。現代墨流し染（染元）。株式会社染美堂代表取締役。1988年、墨流し染を父より継承する。スペイン国立プラド美術館財団会員、アントニオ・ガウディ芸術大賞受賞（2001年）ほか多数。

奈良マラソン
奈良を走ろう応援しよう

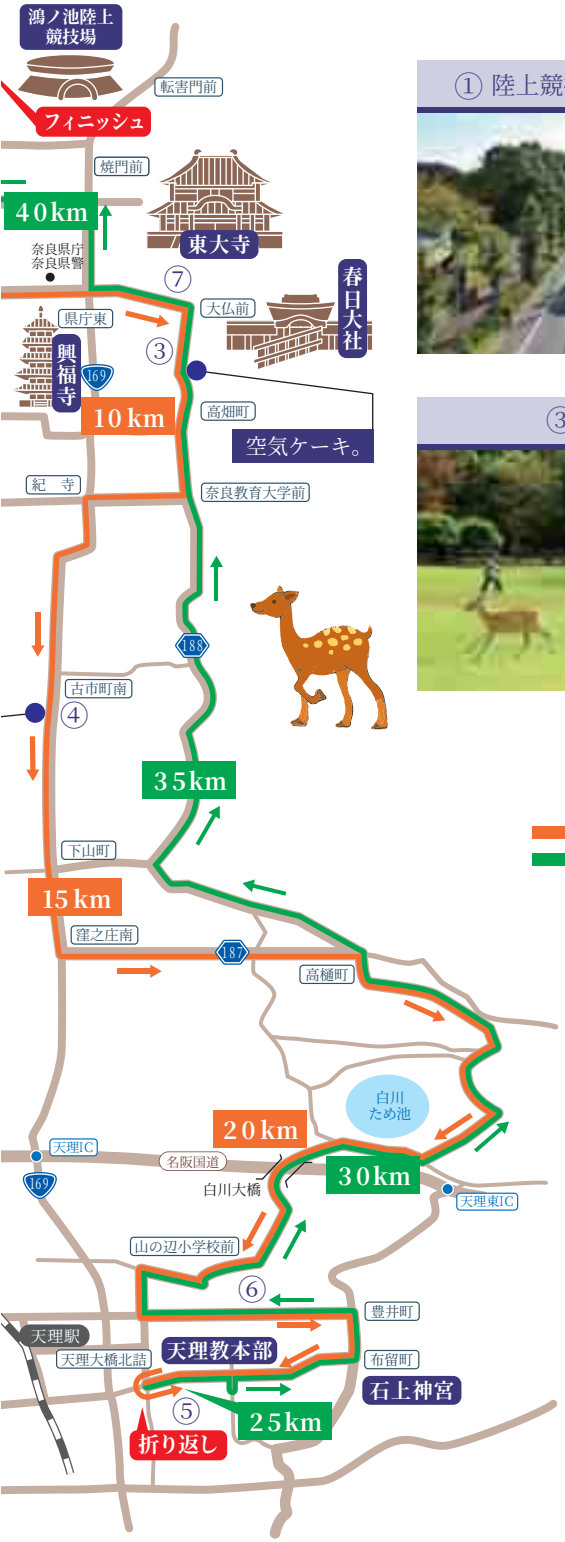
平城遷都1300年記念事業のひとつとして企画された奈良マラソン。2013年12月8日に4回目のスタートが控えます。ランニングブームの追い風を受けて、各地でマラソン大会が盛況です。今年の奈良マラソンは、インターネットによるエントリーが開始後約2時間45分で定員9千人に達しました。

（フルマラソンの定員は1万人。残り1千人は郵送によるエントリー枠）

奈良の師走を飾るスポーツイベントとして定着しつつある奈良マラソン。走る人、「来年こそ」の人、応援好きな人、「よう走るわ」と感服しきりの人、みなさんに楽しんでほしいとの思いを込めて、古都奈良の世界文化遺産エリアや山の辺の道を巡るコースを紙上で試走してみました。

①鴻ノ池陸上競技場をスタート。近鉄奈良駅に向かう緩やかな下り道をランナーが埋め尽くします。

②4㎞すぎ、朱雀門が視界の右に飛び込んできます。5㎞で折り返し。ランナーのみなさん、沿道の声援に手を振ってこたえる余裕もまだたっぷり。



① 陸上競技場スタート付近

③ 飛火野

③8～10kmは奈良公園エリア。たくさんの応援が飛び交い、坂も気になりません。鹿も、今日は何事か！と見守ってくれます。

④12～16kmの天理街道は快走路。有名ロック歌手？の応援が楽しみ。これから始まるアップダウンを考えると、ペースの上げすぎに注意です。

⑤16～22kmは最初の正念場。天理教本部前の折り返し地点ではぜんざいのふるまいや吹奏楽の応援演奏が、後半戦への喝を入れてくれます。

⑥28～30kmは胸突き八丁の上り坂。ここを踏ん張れば、山の辺の道へ。残り10km、カウントダウンが始まります。

⑦奈良公園におかえりなさい。東大寺大仏前の交差点を左折したら、仮装ランナーも脚をつった人も渾身のラストスパートです。

⑧最後の坂を上ったら、いよいよ完走のフィナーレ。陸上競技場の爽やかなブルートラックが「よくやった」と迎えてくれます。

大会にあわせて、鴻ノ池運動公園中央広場では、「奈良マラソン2013 EXPO」が開催されます。奈良のグルメや特産品、各種イベントなど、完走した人も、応援に声をからした人も、ぶらりと立ち寄った人も、奈良マラソンのにぎわいを感じてください。

② 平城宮跡朱雀門

⑤ 天理教本部前

高樋町周辺

山の辺の道

Gourmet Spot

空気ケーキ。

豊かな自然を包む
空気をたっぷり含んだ
ふわふわケーキとカフェ

ふわふわなカステラ生地でカスタードクリームと生クリームをくるりと包んだ「空気ロール」と、こだわりのフルーツで彩られた「季節のショートケーキ」がイチ押し。

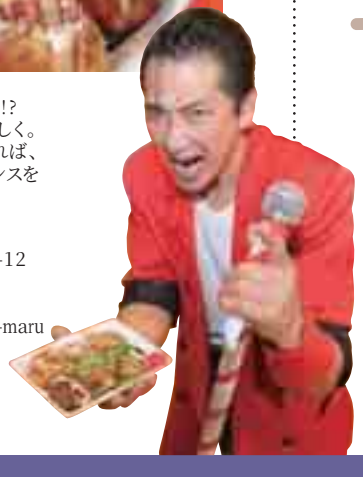
所 在 地／奈良市高畑町738-2　ふれあい会館1階
営業時間／9:00～19:30
休　　日／水曜（祝日は営業）
ホームページ／http://www.kuukicake.com

Gourmet Spot

フトマル

ROCK N ROLLから生まれた
たこ焼きは、カリッとモリモリ
まんまる“元気玉”

ロックでなければ、たこ焼きじゃない!?
ソースorしょうゆ、ネギマヨでよろしく。
「うまい」「おかわり」とシャウトすれば、
ハイテンションなロックパフォーマンスを
目撃できるかも。



所 在 地／奈良市横井1丁目711-12
営業時間／11:30～19:30
休　　日／木曜
ホームページ／http://ameblo.jp/futo-maru

道の駅

station ⑤

ふたかみパーク當麻（たいま）

地元野菜や手作り加工品、自然豊かな公園など魅力溢れる道の駅

二上山の懐にいだかれて
歴史と文化が交錯する町・當麻！

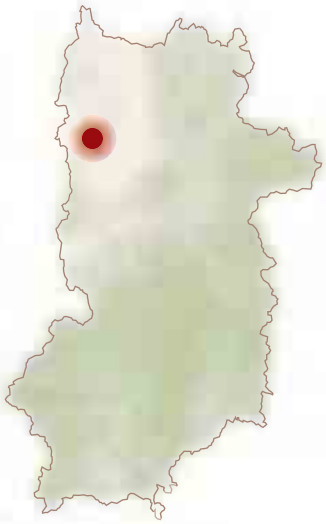
葛城市マスコットキャラクター「蓮花（れんか）ちゃん」

二上山（にじょうざん）の麓にある「ふたかみパーク當麻 當麻の家」は年間19万人以上が訪れる道の駅。駅内1階に加工室があり、餅、漬物、味噌、手作りケーキ・パン等土産に買う事ができます。

一番のこだわりはレストランで味わうことのできる地元産の小麦を使ったうどん。何度も試作を重ね、独自の製法で実現したもちもちの食感がたまりません。

加工室ではうどんやこんにゃくの手作り体験（要予約）を楽しめます。研修を積んだスタッフが丁寧に教えてくれますし、自分たちで作った〝味〟は格別です。家族で体験して、「今度はお友だちとも来てみたい」と、リピーターになる利用者が多いのもうなずけます。

自然いっぱいの公園を併設していることも、ふたかみパーク當麻の特徴です。芝生広場、アスレチック遊具など思いきり遊べる環境が整い、456段の石段の先には展望台が設けられています。家族や友人とのんびり過ご四季折々の開放感が広がるおすすめスポットです。



道の駅ふたかみパーク當麻

奈良県葛城市新在家402-1（国道165号沿い）

営業時間 9:00～17:00（レストラン16:00まで）
休業日：12月31日～1月3日
駐車場：普通車93台、大型車5台、身障者用2台
問合せ：TEL 0745-48-7000
ホームページ http://www.futakami-park.jp/

ふたかみパーク當麻「當麻の家」特選フード

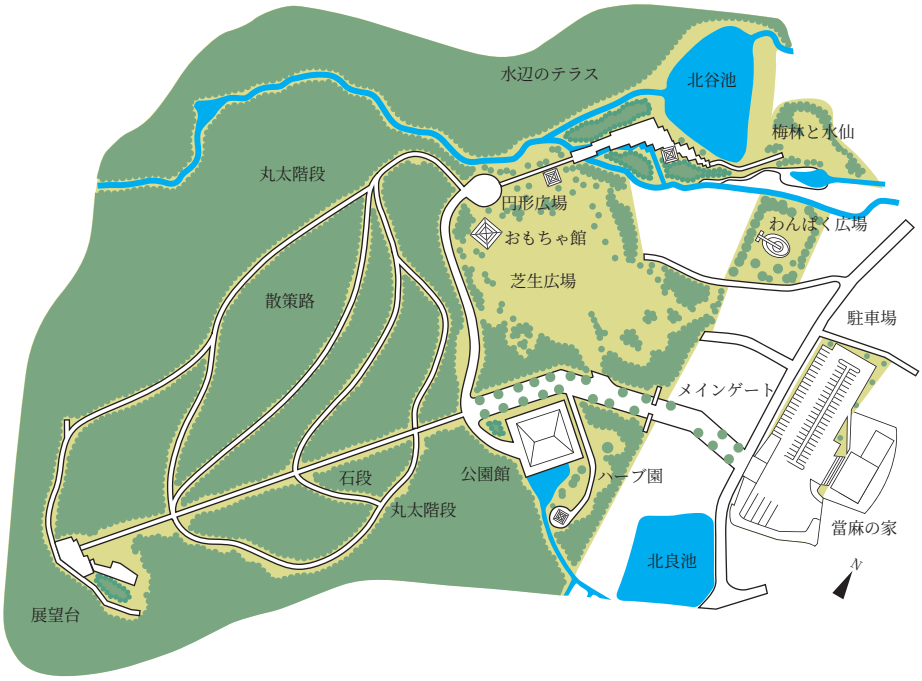
葛城市のキャラクター蓮花ちゃんにちなんだ「蓮花定食」はレンコンまんじゅうやエビフライに季節の野菜が添えられボリューム満点。小麦を表皮のふすまごと使った當麻の家うどんも好評です。

蓮花定食
850円

當麻の家うどん定食
750円

黒米カレー
700円

わんぱく広場　木製コンビネーション遊具・丸太の吊り橋やネット、すべり台などがあります。家族みんなでおもいきり遊べます。



お土産を買おう

紫蘇ジュース
當麻の家の農園で栽培したしそを使用。無糖と有糖があります。

コーヒーケーキ
カシューナッツ、ホワイトチョコレート入り。
他に黒豆や柿のパウンドケーキもあります。

各種ジャム
葛城市の果実を使った安心でおいしいジャム。

よもぎ粉末・しいたけっ粉
奈良県産の原材料を使用した各種加工食品を豊富にラインナップ。

私たちが當麻の家の加工室で作っています。

展望台
456段の石段を登ると展望台が設置されています。葛城市の田園風景を一望することができます。

おもちゃ館
芝生広場（7000㎡）に、子ども同士や家族で遊べるおもちゃを集めた小屋があります。芝生広場の広大なスペースでおもいきり遊べます。

石段・散策路
公園館の横からイノシシ避けのゲートを開けると、456段の石段など、公園の散策路に入ることができます。

公園館
ふたかみパークの管理棟になっていて、事務所、会議室を設置しています。イスとテーブルがあるので休憩をとることができます。

印刷文化逍遥 26

手紙の文化史

編集者から「手紙の文化史」という内容で何か書いてほしいと電話をもらった。これは困ったことになった。実は、手紙も文化もあまり好きではない。

考えてみると、電話が普及する以前はよく手紙を書いたものである。近頃は携帯電話が普及して手紙を書こうという人は少ないだろう。バスの中でも電話をかけているから迷惑なことだ。恐らく手紙などを書く世代は、我々が最後になるのではないかと思ってしまう。

さて、そろそろ手紙のことを書かなくてはなるまい。明治、大正、昭和を通して最も手紙を書き残したのは、作家ではないだろうか。それが証拠に、彼らの全集の中には大概、書簡集が収録されていて、漱石などは書簡集が3冊もあって驚かされる。その中には漢詩あり俳句ありで文才の豊かなことがよくわかる。

漱石の書簡の特徴は、何でも思った通りに書かれ、時には癇癪を起こしてびっくりさせる。天衣無縫というか、性格そのままが手紙の中によく表れている。

明治34年の3月8日の手紙は、妻鏡子に宛てて書いていて、そのロンドンからの手紙には「おれは丈夫だ。余程肥た様だ。然し早く日本に帰りたい。後は其内書いてやる」と強がりなところを書いている。

また同年9月22日には同じく妻に「寺田寅彦から手紙をよこした。妻君が病気で喀血した相だ。それから子供が生まれたさうだ。気の毒と御目出度が鉢合せをして居る」と発信している。親友のことを感じたまま書いていることがわかる。

そして、続く同月26日の手紙には「寺田寅彦から手紙が来た。寺田の妻は吐血した。夫に病気後子を生んださうだ。妻は国へ帰し自身は下宿をする」と寺田のことを報告している。よほど寺田のことが心配だったのか、「可愛相だから時々僕の留守宅へでも遊びに行けと申してやった。行くかも知れない」と寺田のことを気にかけている。

ここには、漱石のやさしい人間性が感じられ、その人となりがよく表れているように思う。こうなると、手紙という範囲を越え、漱石という全人格が立ちはだかってくるのが感じられる。

それから2カ月ほど経た11月20日の手紙では、「君の妻君は御病気はどうです。君の子供は丈夫ですか／学校抔はどうでもよいから精々療治をして御両親に安心をさせるのが専一と思ひます」といっている。

漱石については小説の上のことでならある程度知っているが、それとは別の私生活のことは、こうした手紙によってはじめて知ることができた。

そうすると、手紙とひと口に言っても、1通の手紙からその人間の色々な側面が浮上し、単なる作家だけではなしに、人間漱石の側面が色濃く浮上する。

これこそ手紙の効用であろう。

続いて3月10日の妻宛ての手紙から。「年始状筆の日記倫君の日記いづれも接見致候右は去る二月二十日に着致候皆々元気にて結構に存候此方も丈夫にて暮し居候間御安神ある可く候（後略）」

手紙とはいえ、実際に漱石がものを言っているようにも思え、改めて漱石の人間性を垣間見る思いがする。

こうした手紙の形態はいった

いいつごろから始まったのであろうか。確かなことは知らないが、少なくとも鎌倉時代には既に成立していたと思われる。してみると、奈良時代後期くらいかなとも考えられるのだが、はっきりしたことは言えない。

それにしても、手紙という形態は人間の真情を吐露するにはもってこいであるが、手紙も色々で、中には何を言わんとしているのかわからない、いわゆる意味不明のものもあるから、もらった方はよい迷惑だ。手紙に限らず、文章はわかりやすくて、何を言わんとしているのか、よくわかるのが望ましい。

反対に、あまり短いのも頼りなくて張り合いがない。しかし、何事も程度のもので人によって違うから、それはそれでよいのではなかろうか。

たとえば明治38年1月1日、野間真綱宛の葉書がある。「今日はなぜ上らずに帰った。伝四が来て雑煮を食はせろといふから一所に晩餐を食つた。君も雑煮を食ひに来たまへ。可成晩食の時が落付いてよい」というもの。このくらいならちょうどよい。

ところで、漱石のロンドン留学時代のエピソードを一つ紹介しよう。ある日、街に出て、ガラスに映る一人の男をみた。背が低くて、風采のパッとしないのがいた。よく見ると、それは自分の姿だった、というもの。これは漱石のジョークだったのだろうが、外国でみる自分の姿というものは、えてしてそういうものだろう。

話がだいぶん外れてきたが、ここらでもとに戻そう。自分でものを書くから、他人からの葉書や手紙には無関心ではない。これまで名のある人からもらった葉書や手紙は数えるほどしかないが、その中で忘れられないものがある。

そのうちの一枚は作家で著名なI氏である。ほかに文芸評論家のO氏がいる。この人の文字は癖があって読みにくかった。あと、作家のA氏から葉書をもらったが、どこかになくしてしまった。残念である。

他に誰がいるだろうか。もう失念してしまって思い出せないが、青春の思い出としてしまっておこう。

字のきれいな人は少なく、読みにくい人が多かったのは、個性のしからしむるところであろう。ただし大江健三郎氏のような個性的な筆跡は珍しい。

作家や詩人の筆跡は、それぞれ個性豊かだが、それらの直筆に接することは少なく、多くは本の口絵や写真でしか目にすることがない。一般の読者なら仕方のないことで、めったに直筆にお目にかかることはない。

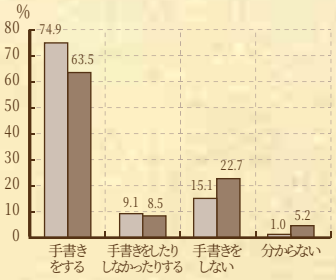
嘉瀬井　整夫

［かせい　ただお］

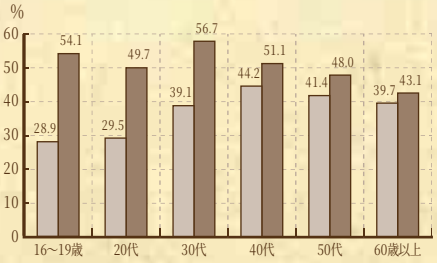
1934年京都市に生まれる。
1949年より94年まで印刷産業に従事。
奈良県立短期大学（現奈良県立大学）卒業。

主著『井伏鱒二私論』
『奈良大和路文学散歩』
『奈良高畑日記抄』ほか。
文芸評論家。

ふだんはがきや手紙などの本文を手書きで書く方か



手紙の伝統的な書式を今後も守っていくべきである



平成16年度調査　平成24年度調査　（文化庁平成24年度「国語に関する世論調査」）

実際に手書きする人は減っていますが、若年層を中心に伝統的な手紙の書式を大切にしようという意識が高まっています。

特集

奈良の城 七

柳生城

奈良にも多くの城が存在した。
時代の流れと共にそれは城跡となり、
私達の心から忘れ去られようとした。
再びその存在を知り、
そこに息づくエピソードを紐解く。
それは、私達のルーツを知ることになる。

城？屋敷？ 質実剛健な剣豪の拠点

剣豪の里・柳生にかつて城があったことはあまり知られていません。城をどう定義するかによりますが、柳生にあったのは、柳生家がまだ豪族だった時代の本拠地であり、江戸時代になってからの柳生陣屋などです。

前者は、南北朝時代にあったとされますが、詳細は不明です。場所は、柳生家代々の菩提を供養する芳徳寺と、柳生新陰流の正木坂道場、その東の山一帯を含む〝山王台〟です。

現在ここに、城らしい城は見当たりませんが、遺構として土塁、堀切、いくつかの郭があるといいます。その名残を探しに坂の上を目指しました。

芳徳寺に至る前に右に折れると、山を切り込んだ堀切があります。草葉が茂る小道は、現在水道施設がある南郭跡に続き、やがて主郭があったスペースに出ます。

青空が開けた広場のほぼ中央に栗の木が立ち、小ぶりなイガをぶら下げていました。豪族としての柳生家本拠は、華美や規模を誇示しない質実剛健な存在だったのでしょう。

落城と再興

大和（奈良）、山城（京都）、伊賀（三重）に接する要衝の地・柳生で〝事件〟が起きたのは1544年。かねて対立関係にあった筒井氏が大和統一を図って、大軍で攻めてきたのです。柳生の里は抵抗するも、わずか二日で無念の落城。柳生家は、筒井氏に従属することになりました。

さらに不遇は続きます。織田信長は柳生家を登用せず、豊臣秀吉の太閤検地では隠し田が発覚し、所領没収の憂き目に遭いました。そんな窮状にあった一族を再び上昇気流に乗せたのが、柳生宗厳（むねよし）・宗矩（むねのり）父子です。

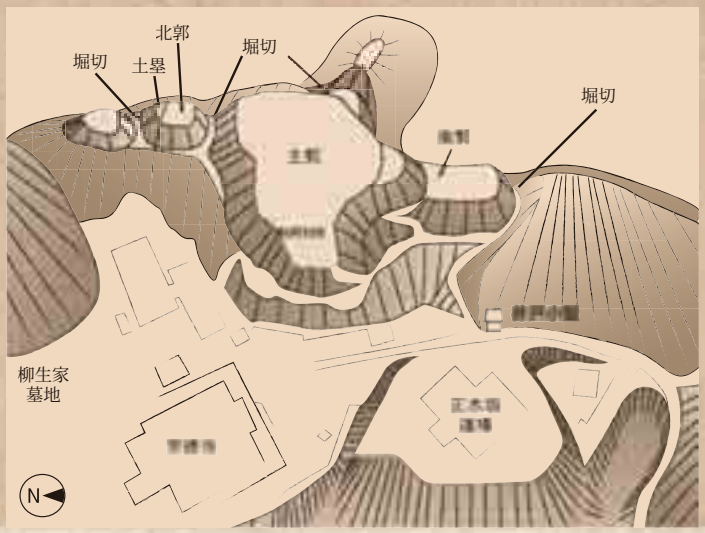
芳徳寺の前に「石舟斎（せきしゅうさい）墨城址」の碑があります。石舟斎は宗厳の号です。宗厳は剣術流派の一つ、新陰流を極め、独自に磨き

高台より城址を望む

●柳生の里
「柳生新陰流」で知られる柳生の里は自然豊かな山里です。江戸時代初期の剣術家である柳生宗矩が柳生藩初代藩主として名を馳せた地であり、宗矩の長男三厳が有名な柳生十兵衛です。

芳徳寺へ登る石階段

●縄張図



をかけた「柳生新陰流」を創始。それに目をつけた徳川家康の前で剣術を披露したのを機に白羽の矢が立ち、1600年の関ケ原の合戦でも武功を挙げて所領を回復しました。

当時すでに70歳を超えていた父宗厳に代わって、子宗矩が徳川将軍家の兵法指南役に就きました。宗矩は大坂の役などで功績を重ね、1636年、柳生藩を興し、1万2千石の大名へと成長しました。

宗矩は芳徳寺や、居館として柳生陣屋を築きました。柳生城の主郭があった山王台から国道369号が走る谷を挟んで西にある柳生陣屋跡は現在、史跡公園として整備され、散策や桜の名所として親しまれています。

剣術を伝授された3代将軍家光は宗矩を強く信頼し、今際の宗矩を見舞った記録があります。その際、宗矩は1万2千石あまりの所領を将軍家に返上。子ら（三厳［十兵衛］、宗冬ら）に親の七光りを与えず、それぞれの実力に応じた処遇を―との遺志を示したといいます。

親子なのにと考えさせられる面もありますが、安易な世襲を断った姿勢に共感する人もいるでしょう。

小高い台地に拠点を構えた柳生家。残された史跡や遺構に触れると、剣士たちの息吹がよみがえるようです。

●陣屋跡
柳生宗矩が3年をかけて建てた柳生藩の陣屋跡です。現在、建物は残っていませんが、遺構を生かした形で奈良市が公園として整備し、往時の雰囲気を今に伝えています。

●堀切跡
堀切とは主に外敵の侵入防止のため城や集落の周囲に人工的に開削された堀のことで、柳生城には南北2本ずつ堀切があり、その堀切で区切られた郭が存在します。

アクセス　バス／奈良交通バス「正木坂」下車、徒歩10分
車　／西名阪道郡山ICから国道24号、国道369号、芳徳寺下に市営駐車場あり

命が吹き込まれる

森があり

安川忍氏の現代墨流し染を用いたブローチ

Imajin21

今人
創造

悠久の歴史の流れ、古の都は
今も、その面影を色濃く残す
いくつものドラマがあり
新たな時代が生まれた
そこから先人の英知を知り
人を見つめ直す
そして「今」を創造す

KYODO SEIHAN PRINTING
KSP

樹が育ち

そして紙ができ

FSC ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C007718 www.fsc.org

本誌は、「FSCミックス認証紙」を使用しています。

VEGETABLE OIL INK